
八洲学園大学家庭教育研究会会報

第3号

2009年2月20日発行

第3回家庭教育研究・活動報告会 報告要旨

第1部：研究・活動報告（発表順）

家庭の中の読み聞かせの役割

塚崎 貴代美

読み聞かせとは、主に小さな子ども達を対象に、絵本などを音読することで、読み手と聞き手が共に作品を分かち合うことをいう。読書活動の一環からか、近年、一層盛んに読み聞かせが推奨されている。地域や教育現場での集団の場での読み聞かせと、家庭における個人的な読み聞かせに分けることができる。

家庭での読み聞かせの場合は、何に配慮すべきだろう。基本的には保護者と子どもが一緒に楽しめることが第一である。もちろん、図書館などで推奨する、長く読み継がれてきた良い作品は、家庭でも率先して子ども達に提供すべきである。しかし、しかけ絵本やアニメ絵本、キャラクター絵本など、図書館にはない作品もたくさんあり、読書を娯楽と考えるとすれば、家庭でどんな作品を手取るのも自由であるともいえる。家庭というところは、まったくのプライベートな場であり、どんなものも包み込む懐の深さがあると思う。ただ、長く読み継がれてきた良書と評されている作品には、それなりの理由と説得力があり、これらの作品を子ども達の心の成長の糧と考えると、主食に相当するほど大切なものであることは、保護者として肝に銘じておく必要がある。

ところで、あたかも家庭での読み聞かせが当然のように考えられているが、家庭での読み聞かせが本格的に推奨され始めたのは、つい最近のことである。ひと昔前までの多くの家庭では、読み聞かせなどという概念も知らなかっただろう。私が子どもだった頃の物語

の楽しみ方といえば、布団に入ってから数分の寝物語が主流であった。しかし、昭和 40 年代以降、テレビが普及し始め、強烈な刺激と印象で寝物語が少しずつ廃れてしまった印象がある。子どもの頃の居間を思い出すとき、常にテレビがついていたという人は少ないだろう。メディアは情報を垂れ流しするだけで、心と心が相互に触れ合うことがない。テレビに育てられた世代が親となり、その子ども達世代の多くにコミュニケーション能力の希薄化が認められている。これらの危機から脱却するため、親子のふれあいの時間を濃密にしましょう、そのための道具が絵本なのです、といった三段論法が世間を席卷し、家庭での読み聞かせというものが脚光を浴び始めた気がしてならない。家庭での読み聞かせがどのような形で定着し、浸透してゆくかはこれからの大きな課題であろう。

最後に、私は、家庭で本を手にする場合に最も大切なのは、どれくらい真剣に子どもに向かいあっているかという姿勢ではないかと考えている。家庭で子どもにお話をするときや本を読むときは、様々なジェスチャーや声色を使い、過剰なほど喜怒哀楽を前面に出してよいと思う。親が絵本を楽しんでいる姿は、間違いなく子どもに大きな影響を与えるからであり、子どもの反応を楽しみながら親もまた、豊かな感性を子どもから与えられるからである。小学校など公共の場で読み聞かせをする場合の読み手は絵本の付属品となるが、家庭で読み聞かせをするときの絵本は、子どもとコミュニケーションを楽しむ道具の一つになっている気がする。

(つかさき・きよみ 八洲学園大学家庭教育課程 2008 年 3 月卒業、
現在、同大学人間開発教育課程在学中)

司会者コメント

塚崎さんの「家庭の中の読み聞かせの役割」について

生越 詔二

1980 年代から教育改革が進行している中で、小・中学校教育をめぐる状況は大きく変化しています。なかでも、学校週 5 日制の実施は学校教育の在り方を変化させたものの一つです。学校・家庭・地域社会が一体となり、三者の連携協力の下に子どもを育てようとする学校週 5 日制の考え方は、具体的には「開かれた学校」として保護者や地域の人々に対して様々な協力要請がなされるなどの変化が生じてきました。

こうした状況の中で塚崎さんはいち早く、小学校での読み聞かせボランティア活動に取り組み、子ども、話し手双方に様々な課題を乗り越えながら実践を続けているお一人です。小学校での読み聞かせは、「読み手も聞き手も玉石混交かつ、過渡的」であるとし、将来的には、子どもや読み手である親の個性を認めながらも一定の水準を求める必要性を強調されました。このような活動に加えて、地域活動の一環として図書館でのボランティア活動にも取り組まれています。

こうした活動実績を踏まえて、最後に読書を含めて子どもの健やかな成長のベースとなるのが家庭であるとし、読み聞かせをすることによって親子共に笑って気持ちよさを共有する大切さと、そうした親の姿を見せることにより子どもに豊かな想像力を養おうとしていることを述べられました。一連の活動を通してのまとめとして、学校と家庭にはそれぞれ固有の役割があり、家庭がしっかりすることが第一であること、親が教育の第一義を負うべきであることを協調されたことが印象的でした。

また、家庭と学校の連携も過渡期であることを指摘されたうえで、課題をいくつか提唱されたことは、今後の読み聞かせ活動等の在り方を考えるうえで参考になる報告内容であったと思います。塚崎さん、ありがとうございました。

(おごせ・しょうじ 八洲学園大学教授)

父親が育児すると母親の育児ストレスは軽減される

高祖 常子

「父親も子育てする時代」と、少しずつ言われるようになってきました。しかし、一部の積極的な父親たちを除くと、まだまだ子育ては母親がするもの、やりたいと思っても時間がなくてできないと、逃げ腰の父親たちが多いのが現状です。

地域の人とのコミュニケーションも減りつつある現在、子育て中の母親が孤立化し、ストレスをため、さらには子どもへの虐待に繋がっているという状況も懸念されています。

そこで、父親が子育てすることで、母親のストレスが軽減されるのではないかという仮

説を立てて、インターネットサイト「こそだて」にて、アンケート調査を実施してみました。父親が子育てすることのメリットが明確になれば、父親自身が子育てすることにもう少し前向きになるのではないかという思いからです。

アンケートの結果から、父親が家事や子育てすると、母親のストレスが軽減されること、さらに、家事より子育てに重点を置く方が、母親が育児ストレスを感じる度合いが低くなることが明らかになりました。

情報が溢れ過ぎているために、子どもの成長や様子などが平均からそれていないかと不安になっている母親たち。核家族化や地域でのコミュニケーションが不足し、子育てのさまざまな実例を見る機会が少ないために、自分の子育ての方法が間違っていないかと心配になっている母親たち。「父親は外で働いているから、育児をする時間がない」「子育ては母親だけに任せておけばいい」という時代ではもうありません。子どものためであることはもちろんですが、育児に追われる母親を支えることも、父親の重要な役目でしょう。母親も育児ストレスを軽減させるためにも、また子どもが、家族が、楽しく幸せに暮らすためにも、父親が「育児参加」という援助的な姿勢でなく、育児に主体的に関わることはとても大切だと思います。

そのような父親としての意識を持てるようにするには、父親になってからでは難しいこともあります。父親自身の心がけはもちろん必要ですが、国や自治体、企業などの父親育児への後押しも重要だと考えます。

自治体では、母親学級を両親学級という名称にしたり、母親学級と父親学級の両方を実施しているところもありますし、母子手帳の父親版を作成したり、父親向けセミナーも活発に行われるようになってきました。NPO法人ファザーリング・ジャパンが2008年に「子育てパパ力検定」(通称「パパ検」)を実施するなど、NPOなどの動きも活発になってきています。

でもこれらはまだほんの一部の動きにすぎません。妊娠中の父親学級の普及はもちろん、学校教育の中にも子育てに関するプログラムを積極的に取り入れるなど、子どもが成長し大人になっていく過程の中で、子育てをより身近に感じることができる社会の体制作りが必要であると思います。

そして、父親も母親も一緒に地域の中で子育てしていくこと。日頃のご近所との付き合いはもちろん、児童館や地域の子育てイベントなども活用して、開かれた育児をしていく、父親も母親も子育てを楽しむことこそが、今まさに大切であると言えるでしょう。

育児ストレスを（「日々」または「たまに」）強く感じている割合

育児・家事とも、すごくよくやってくれる	30%
育児はやってくれるけれど、家事ももっとやって欲しい	38%
家事はやってくれるけれど、育児ももっとやって欲しい	46%
育児も家事も、もっとやって欲しい	46%

インターネットサイト「こそだて」(<http://www.kosodate.co.jp>)により実施した調査。

調査期間は平成 20 年 1 月 1 日～31 日。女性 597 人の回答より集計

（こうそ・ときこ 八洲学園大学家庭教育課程在学中）

司会者コメント

高祖常子さんの発表を聞いて感じたこと

福田 博子

高祖常子さんの発表は、卒業論文の報告であった。高祖さんはご主人と共同で「こそだて」のホームページ <http://www.kosodate.co.jp> を運営されており、ここでアンケート調査をされ、卒論をまとめられたのである。要は、父親が家事や育児を手伝うと母親の育児ストレスは減少する。家事といってもゴミ出しや風呂掃除が多く、料理や洗濯はそう多くはない。ゴミ出しと言ってもゴミの入ったポリ袋をゴミ集積所に持って行くのである。また、育児といっても子どもの遊び相手や、お風呂に入れることが大多数である。父親が育児を手伝うと、母親の育児ストレスは家事を手伝われるよりもっと減少するというのである。その他、日本の男性の育児休業取得状況については、31.8%の男性が育児休業を利用したいと考えているが、実際の育児休業取得率は僅か 0.57%である。今や、母親だけに家事や育児を押し付けることは不当なことである。そういう意味で、まさに時宜を得た発表であった。惜しむらくは、資料が多過ぎて、煩雑な感じが否めなかった。資料を選択して、自分の感想や意見を沢山発表されたらもっとよかったのではないか。また、対象の子どもの年齢については明らかではなかったが、後日聞いた所によると、答えてもらった人の子ども

の年齢は、0~6歳が約9割（0~3歳が約6割）で、それ以上の年齢の子どももいる。子どもが大きい場合は、過去を振り返って解答してもらったそうだ。

高粗さんは色々な活動をされており、活動についての簡単な報告もあった。主なものは以下のとおりである。

オールアバウト <http://allabout.co.jp/> で、「妊娠・出産準備」の編集ライターを、また、次の二つのNPOに所属していて、メンバーと一緒に活動しているそうである。

NPO法人ファザリング・ジャパン <http://www.fathering.jp>

子ども虐待防止オレンジリボン運動 <http://www.orangeribbon.jp>

その他、育児のフリーマガジン「miku（ミク）」の編集長であり、雑誌を年に4回発行している。<http://www.brightway.jp/gaiyou/member/miku.htm>

このように、沢山の育児中の親の支援をされており、敬服に値するものである。本学にこのような学生が在学していることは、誇りにしてよいであろう。

（ふくだ・ひろこ 八洲学園大学教授）

第2部：講演

「日本の家庭支援はまだ夜明け前～家庭支援先進国・カナダに学ぶ～」

ライアソン大学認定ファミリーライフエドゥケーター 林 真未

講演者エッセイ

家庭支援と家庭教育

林 真未

「衣食足りて礼節を知る」という諺がありますが、まさにこれが家庭支援と家庭教育の関係だと思えます。家庭も、衣食（支援）が充実していなければ、礼節（教育）には至れないのです。

私は、家庭教育を志す皆さんは家庭支援の担い手でも考えています。また、ファミリーライフエドゥケーターは、教育的な手法を使った家庭支援のスペシャリストです。

以下は、この辺の私の想いを書いたエッセイです。

「子どものフツウを知ってください」

アミーゴプリュス「こどものいる暮らし.COM」サイト連載エッセイ

「林真未と有田リリコのコラボでコラム大作戦」

<http://plaza.rakuten.co.jp/kodokuracolumn/diary/?ctgy=9> より

私が講座で使う自作の資料に「子どものフツウを知ってください」というのがあります。そこには、月齢ごとに、とてもフツウとは思えないような子どもの発達やふるまいが羅列してあります。(資料「子どものフツウを知ってください」は文末に掲載。)

???

「子どものフツウを知ってください」なのに、フツウじゃないことが載っている？

どうしたこと～？

.....とにかく、私が出会うお母さんたちは、みんな心配しているのです。

雑誌にはこう書いてあったけど当てはまらない、うまくいかない、

周りの子はみんなこうなのにうちの子だけどうして？

親や姑に「フツウはこう」といわれたけど....、

気にしていなかったのに保健所でチェックされちゃった、等々。

だけど、大人が想像するよりずっと、個人差のある育ちをするのが子どものフツウ、ちょうどひとりひとり顔がちがうように、育ちかただってひとりひとりちがうのが、子どものフツウなんです。

あるいは、初めてのママにしたら「こんなことで将来大丈夫なんだろうか」って心配になるようなことも、たーくさんたくさんやるのが、子どものフツウ。

そこで、大人には「フツウじゃない」と思えることが、実は、子どものフツウなんだよって伝えたくて、この資料を作りました。

しっかしなあ。

そもそも、「モグモグ期」「カミカミ期」「ゴックン期」とか「早寝早起き朝ご飯」とか、「ハイハイ期」「ヨチヨチ期」とか「発達曲線」とか、今の時代は、いろんな規範や情報がありすぎるんだよー。



イラスト：有田リリコ

現代日本においては、ファミリーライフエデュケーターの役割って、そういう過大な情報から、お母さんたちを護ることっていう気がいつもしています。

日本の専門家の多くは、「子どものために、なるべくまともな育て方をお母さんにして欲しい、そして子どもがちゃんと育っているかチェックしたい」と思っているような気がしないでもない。

でも、私の学んだ家庭支援では、



イラスト：有田リリコ

「親のひとりひとりには、子育てする力が充分にある」

「誰もが子どもを善く育てたいと望んでいる」

という前提に立ちます。そして、個々の親(養育者)それぞれにちがう、それを妨げている
バリアを取り除く作業が、家庭支援なんです。

家庭支援には、ファミリーセラピー、ファミリーソーシャルワークなどいろいろありま
して、そのなかの一つが、ファミリーライフエデュケーション、つまり家族のための教育。

教育といっても家庭支援ですから、やはり教え込むというより取り除くイメージ。
あくまでも、「知らない」というバリアを取り除くことによって、その親(養育者)が子育て
しやすくなるのがたいせつな目的。

だから、「こうすべき」と教えられたけどできなくて、逆に子育てがづらくなった、なん
てのは、ファミリーライフエデュケーションではありません。

っと、ついつい熱く語ってしまいましたが、まあ、家庭支援とかファミリーライフエデ
ュケーションとか難しいこといわなくても、.....そうだな、初めから情報がなくて、5,6人
育てたベテラン母さんがひとり、初心者ママのそばにいただけなら、みんな、こんなに子
育てに悩まないんじゃないかなあ。

西洋の諺に、こういうのがあるそう。

「時計を一つしか持っていない人は、今、何時かわかっている。」

たくさん時計を持っている人は、いつも悩んでいる」

(はやし・まみ TRAILBLAZER mami-family life education office)

文中の「資料」というのはこちらです...

子どもの「フツウ」を知ってください

~なんとこれが「フツウ」なんです。だからどうぞ気に病まないで。もし、ここに書いてあることに当てはまらなくても、それもやっぱり「フツウ」です！~

生後すぐ~1ヶ月
ほとんど寝ている・よくぐずる・泣きやまない・ほとんどの子が夜泣きをする・無表情・うんちは、最初は黒で、すぐに黄色や緑や水っぽいもの、つぶつぶ交じりなどいろいろに。甘酸っぱい臭い・皮膚に赤いあざやぶつぶつ、頭にフケみみたいなもの・頭のかたちははいびつなこと多し・お腹は出ていること多し・掴む力が強い・よく吐く・あくび、おなら、しゃっくりなどは一人前！・手はたいてい万歳している
1~3ヶ月頃
頭の後ろがはげている・髪の毛は様々・おしっこ、うんちの量も様々・鼻のぐずぐず、胸のゼロゼロがあることも・母乳、ミルクの飲み方、夜の眠り方も赤ちゃんによって様々・しっしんが出てくる・ほとんどの子が夜泣きをする・笑顔や、アーアーウクンといった喃語が出てくる・指しゃぶりを始める・ふとんをけとはず・腹ばいにしても頭を上げない子もいる
3~6ヶ月頃
赤ちゃんらしい体つき、お腹が大きくO脚・頭のてっぺんに骨のない部分がある・おしっこ、うんちの量はやはり様々・よだれ多し・同じ月齢でも、体の大きさに倍ぐらいの差があることも・頭が大きい子、身体のほうが大きい子、同じくらいの子いろいろ・指しゃぶりも盛ん・うつぶせの嫌いな子もいる・うつぶせ時の頭のあげ方も様々・夕泣き、夜泣きなどは、理由のわからないことも多し
6~9ヶ月頃
歯が生えない子もいる・離乳食が始まるとおしっこが濃くなることもある・うんちは3日位に1度から1日に何度もまで個人差あり・うんちのとき顔が赤くなるくらい力むことも・身長60~75センチ体重6.5~10キロ位・体重の増え方が鈍ることあり・つかまりだちができない子もいる・人見知りすること多し・母乳、ミルクはまだ飲んでいいる・病気の際は頻りに乳を吸う・偏食である・食べ方にムラがあることも・トイレのしつけは難しい・添い寝が当然・よく泣く・すぐ抱っこしたがる・夜泣きする子も朝まで起きない子もいる
9ヶ月からお誕生過ぎ
6~9ヶ月の特徴が続く・やせてくることが多い・身長67~78センチ体重7~11キロ位・歯の生え順に決まりはない・歯ぎしりをする子がいる・寝る時間が減る・夜泣きする子も朝までねる子もいる・ハイハイをしない子もいる・歩かない子もいる・怖がりになる・母親がいないとダメになる・おちんちんなどをいじくる・芸を覚えない子もいる・トイレのしつけはまだ難しい・まだしゃべらない子もいる・母乳、ミルクはまだ飲んでいいる・遊び食べ、食べ散らかしをする・夜中に起きて遊びだす子もいる・音楽、踊り好き・親が「じゃま」「いたずら」と感じることも多し
1歳半くらい~
落ち着きがない・あきっぽい・偏食、量にもムラ・母乳をまだ飲む子もいる・片付けはできない・わがまま・かんしゃくをおこす・お気に入りができる・けちんぼう・人にものを貸さないのに人のものをほしがる・なまいき・じまんげ・服を選び始める・大人のをいじりたがる・親にまわりつく・お母さんのほうが好き・注目がないと大人の間に割り込んでくる・きょうだいに関心がないことも・友だちと遊べない
2歳前後~
1歳半くらいからの行動は続いている・一つの事を長時間することもある・母乳を飲んでいる子もいる・偏食のある子もいる・片付けはできない・かんしゃくが激しくなる・けちんぼう・「ひとりでする」が多くなる・注目を得ようとする・子どもをみても仲間に入ろうとしない子も・どもることもある・昼寝をしないことも
3歳~
かんしゃくがへってくる・干渉をきらう・ほめる、叱るに敏感・約束はできるがすぐ忘れる・戸外大好き・できないことも一人でやりたがる・できることでも「やって」と甘える・まだお母さんのほうが好き・添い寝もまだしている・きょうだいと遊び始める・友だちと遊び始める・けんかもする・おしゃべり・うそでごまかす・譲り合いはできない・想像の話をする

TRAILBLAZER MAMI FAMILY LIFE EDUCATION

***参考資料： 家庭支援の基礎となる概念**

Empowered	-	Paternal
内なる力を信じそれを顕在化する		援助の必要な存在と考え干渉する
Bottom up	-	Top down
下から支える		上から指示する
Strength based	-	Deficit or needs based
長所に注目しそれを伸ばす		欠点や必要なことに注目しそれを補う
Resource based	-	Service based
すでに地域に存在する資源を活用する		地域の外から解決を試みる
Community oriented	-	Professional oriented
地域の人材や相互支援をまず考える		専門家の指示に従い解決策を講じる
facilitator	-	Expert
当事者主体で、それを支援し促進する		専門家が指導的立場で当事者に対応する

指導モデル	援助モデル	促進モデル
<ul style="list-style-type: none"> ・ 上から下へ ・ 単方向コミュニケーション ・ 指示的 ・ 画一的サービス ・ デフィシッドベースド 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同じ高さの目線 ・ 双方向コミュニケーション ・ 非指示的 ・ 個別的サービス ・ デフィシッドベースド 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 少し下から上へ ・ 他者を含んだ他方向、多角的コミュニケーション ・ 情報提供やコーディネート ・ リソースを引き出す ・ ストレンスペースド

(作成；ダンスト、翻訳；林)

編集後記

第3回研究・活動報告会が、2008年11月24日(月)13:00-16:40、八洲学園大学6A教室で開催され、eLYでもライブ配信されました。

第3回研究・活動報告会では、本学学生2名が研究・活動の報告をしたほか、学外から、家庭支援の活動を展開されており、カナダのライアソン大学でも学ばれた林真未さんをお迎えして、家庭支援についてお話しいただきました。本会報には、その報告会の報告要旨及び林さんのエッセイを掲載しました。

次回は、2009年3月下旬に開催する予定です。日時については、決まり次第、家庭教育課程ブログでお知らせいたします。卒業生もご参加いただけます。また、報告者も随時募集しておりますので、発表していただける方は、家庭教育課程 (home-edu@yashima.ac.jp) までご連絡ください。

本研究会は、本学の学生・卒業生・教員が自由に参加する会です。入会手続きも会費も不要です。